

イギリス留学体験記

— カエサルも尻尾を巻いて逃げ帰った最果ての島アルビオンより —

小堀 馨子

イギリスに留学して一年以上が経ちました。予想していたほどの違いはないと感じたり、逆に予想外のことが起こったり、と一概にまとめることは出来ませんが、少なくとも個人的には自分の性に合った国だと感じている事を前提にして、現在の時点での「留学体験記」なる駄文をものして、お目汚しするといたします。

まず学問面で気づいた事を述べてみます。現在私は「古代ローマの宗教」をテーマとして博士論文を書くために、ロンドン大学の中の University College London というカレッジに research course から入って二年目になります。まだ正式の PhD の学生としてアップグレードされてはおらず、MPhil というステータスで研究をしています。最も早く二年目の二学期（2002年1月から始まる学期）に、博士論文の一章分・論文全体の構想・口頭発表の三つからなるアップグレード試験に臨んで、合格すれば、正式の PhD 学生になれる見込みです。時代的にはローマの共和政末期から帝政初期、即ち紀元前一世紀から後一世紀初頭までを対象としています。私が入ったのは、宗教学科ではなく歴史学科でした。イギリスの大学では普通、古典古代史を学びたいと思うと「古典学科」に入学するのですが、UCLは古代史が「歴史学科」にある数少ない大学の一つであり、他の時代の歴史をやっている方との交渉があるのは、日本の大学の歴史学科と似ていて、違和感なく受け込める環境でした。

ここで学制について触れておくと、私が research course から入れたのは非常に幸運だったと思います。このように取り計らって頂けたのは、日本で博士課程を長くやっていた事、書きたいテーマ

が決まっていた事、書き上げたら日本に帰る事、などの諸要因があったからだと推測しています。何れにせよ、授業を幾つかとって一つの授業毎に3-5,000語くらいのエッセイを一年に三から四篇書き、授業毎の年度末試験をも受け、その他に10,000語から20,000語の修士論文を執筆する、というたった一年ですがとてもやる事が多くて困難の多い taught course を経ずに済んだ事は、とても幸運でした。研究コースの学生は、週二つのゼミに加えて、一月に一度の学科全体の総合ゼミに出席すればよく、後は指導教官との定期的な一対一の面談で、その時までには自分が考えた事、書いた事を持参して議論し、次のステップを決める、という次第で事が運んで行きます。この面談の日時は指導教官とその場その場で次回を決めるので、かなり時間は自由になります。ただその代償として、学友との交流は週二度のセミナー、及びセミナーの後のパブでの会話のみとなり、互いが忙しいため、校外で会って一緒にお茶を飲んだり、映画に一緒に行ったり、という関係を作り上げるのはなかなか難しいように感じました。また歴史学科の古代史は留学生とイギリス人の割合が半々で、イギリスの方がやや多めですが、他国の学生としてはイタリア人とギリシャ人が圧倒的に多く、(フランス人とドイツ人が少ないのは、自国の古典古代史関連学科が充実しているため、海外にわざわざ来る必要がないのでしょう)アジア人は、上の学年のマレーシア人の男の子と日本人の私の二人だけでした。これは「古代史」という学科だからであって、他の学科ではアジア人や日本人の割合もかなり異なるようですから、この学科の主題に由来する特殊性は心しておかねばなら

ないでしょう。

次に学問的雰囲気に移りますが、こちらの歴史学科の雰囲気は日本のものとはちょっと異なっている気がします。他の分野のことは知りませんが、あくまで西洋古代史の分野での比較という限定された見解ではありますが、イギリス歴史学の方が、かなり守備範囲が広いように感じました。例えば、私の分野は「宗教」に関わっているため、日本の西洋古代史の範囲内で研究を行おうとすると、思想に関する部分に踏み込み始めた途端に話をするのが難しくなってきます。しかしこちらでは、思想に関する部分であってもきちんと歴史学的な資料の取り扱い方法を踏んでいれば、奨励されていると感じました。私自身は個人的に日本で、宗教学に学びつつ歴史学でも受け入れられるのはいかに難しいことかと非常に葛藤を感じていたので、こちらに来てみて、まるで日本の宗教学の指導教官から受けていたような指導を歴史学である私の現在の指導教授から受けている事に対して、一体自分はどこに向かって拳を振り上げていたのだろうと、最初に気づいた時には茫然としてしまいました。

方法論面でも、文字資料の読み方に関して、古典学の知識との連携が図られている点は日本の古代史学と同じですが、それが碑文だけに偏ることなく、文学資料にもゆうに生かされている点は層の厚さを感じています。しかもイギリス史学は、日本の歴史学が基調にしているドイツ史学と異なり、イギリス経験主義の流れから出たものだと感じられますし、他分野との相互乗り入れには非常に積極的でした。2001年3月に出席したイギリス全国の院生と若手研究者が集まる学会では、「歴史学の歴史学たる由縁をもう一度見直して、歴史とは何か、と考えるなければならないのでは？」という意見と「歴史学は歴史学でござい、と言って他との境界線を引くのではなく、考古学や人類学、経済学などの隣接諸分野との交流及び領海侵犯を積極的にすべきだ」という意見とが交わされて後者の方がかなり優勢だったのには興味深く感じました。

従って、若手院生たちは他分野の事を既に学んでいる、あるいは入ってから学び直すことを要求

され、寄り道無しに進学してきた私の一年上の先輩などは、今年度一年、歴史学の方を休学して同じ大学の考古学科の研究コースに一年間学内留学を命じられていました。そういう意味では「宗教学」という他分野から来た私は、それ故に複数の discipline を既に身につけている、との期待のもとに受け入れられ易かったのかもしれませんが。ですから、もう多くの先輩方がおっしゃっていることですが、宗教学に確立した方法論がないということは、嘆くべき事ではなく、逆に他の分野に対して開かれている可能性が大いにあるということなので、利点を積極的に活かして、文学なり考古学なり経済学なり（あるいは社会学なり人類学なり心理学なり）関連諸分野との連携を深めて、新しいものを生み出してゆける、一步先んじた出発点にいと考える方がよいと、こちらにきて改めて感じました。

次にセミナーに出席して感じた学生気質ですが、これはセミナーの構成集団によってかなり違います。学部の授業のゼミでは、他学科から来ている学生も多い故に、あるいは若さゆえの大胆な発言が多く、的外れの質問もある一方で、時には基本事項であっても、思いがけない本質をつくような質問が出て、先生との間で結構な議論になったりしている事態を見て、日本の大学生との違いを感じました。しかし、古代史を専門とする者たちで、かつまだ taught course に在籍している人間だけが集まっているセミナーの場合は、学生たちは日本の学生のようにおとなしく、先生が発言を促しても、しーん・・・という場面をほぼ毎回の授業で見受けました。その後ようやく誰かが質問や提言を發したとしてもそれに対する反応は余り出でこず、投げかけだけに終わってしまいました。一方、研究者の卵としての自覚を持った研究コースの院生が上の学年から下の学年まで一同に会して互いの研究発表を聞く、先生抜きの水曜ゼミのようなセミナーでは、リード役の上級生たちとそれを受けてぼつりぼつりと発言して行く下級生たち、という両者の望ましい連携状態が出現していました。最後に週一度催されている、若手研究者と研究コースの院生が一堂に会して若手及び壮年研究者の発表を聴くセミナーでは、さ

すがに議論は活発で、留学生は最初に発言しないと後はもう入るチャンスがない、という、よく留学生の間で言われていることが実感として感じられました。ただ、議論が畳み掛けるような感じで淀みなく行われていても、喋り出したら止まらない、あるいは他人が喋っているのに割って入って話題を奪う、と言ったはしたない光景は減多に見られず、生き活きとした活発な議論の中にも礼儀が感じられました。そして議論がたけなわになった頃に時間も終わりに近づくので、「ではこの続きは、いつものパブで。」と司会者が言ってお開きになり、都合のつく人が隣のカレッジのパブに移動してそこで議論の続きが繰り広げられるという展開も、どこか日本の研究会ののりと通じるものがあって、馴染み深い雰囲気だと感じるものがしばしばありました。

このようにアカデミズムの雰囲気としては、日本でも馴染み深かった光景に出会う事が多く、余りに空気がしっくり来過ぎていて、自分は本当に外国にいるのだろうか、と思うことしばしばでした。聴く事に関しては、「ロンドン是世界一英語の通じない都市である」というジョークがあるくらい多様な英語が氾濫しているので、アカデミック英語以外の訛のある英語（ロンドン下町訛、スコットランド訛、アイルランド訛、地中海系の英語、カリブ系英語、インド系英語、中国系英語などなど。面白い事にフランス訛、イタリア訛など自分が習った言語の訛は距離がわかるだけにそうだと知って聴くと分かりやすいです。）はかなり辛く感じます。しかし、やはり異国人であることを痛感させられるのは、論文を書く時です。日本語だったらこうも気の利いた言い回しがぱっと頭に浮かんでくるのに、この微妙なニュアンスを書き分けられるのに、と隔靴搔痒感に悩まされています。特に後者は、日本語と英語の本質的な言語としての違いに根差していることも多いゆえ、思想を表明する器としての言語という観点からの言語哲学的語学学習の重要性を痛感しています。

このように英語に対してハンディがある学生についての英語面の学校によるサポートですが、これは大学によって異なっています。ケンブリッジでは「指導教官 supervisor」は学問上の指導を

する人であり、それとは別に若手研究者が tutor として留学生に一人ずつついて、生活面の相談に乗ったり、論文の英語を見てくれたりします。しかしこちら UCL では、指導教官が全ての役割を引き受けています。それとは別にコースコーディネーターの教授もいるのですが、こちらは学科にたった一人の存在であり、奨学金の書類に関してなどは、こっちの方が詳しくあったりするくらいで、全然当てになりません。私は知り合いの方に、お金を払って英語の文章表現だけを見てもらっています。語学学校の先生をもしている方なので、時々アカデミズム論文風でなく、語学学校のエッセイ風の直し方をされる時もありますが、それはそうであっても、直して頂く価値は大いにあると思っています。（留学を考えている方で具体的な金銭面がお知りになりたい方は、直接当方 (keiko.kobori@nifty.ne.jp) までご連絡ください。）

金銭面に関して言えば、奨学金を考えている方の場合、こちらで取るのは非常に難しいです。日本で取るのも難しいのですが、こちらでは、表面上では差別はないと言っている、全体的に眺めるとどうしても common wealth などの英国を旧宗主国とする国々や、ヨーロッパの学生の方が、有形無形で恩恵を蒙っていると感じざるを得ません。サッチャー政権の時に留学生から授業料を高く取る政策が実現されて以来、英国人及びヨーロッパの国から来る学生の学費と、ヨーロッパ以外の国から来る学生の学費とは三倍から七倍の格差を付けられてしまいました。これは先進的と称されているヨーロッパの国がどこでも抱えている移民問題とも密接な関連があるらしいのですが、一留学生の現状としてはとにかくにも苦しいです。それに加えて、日本で大きな声で言うと角が立ちますが、こちらでは階級制度が以前ほどではなくなったものの日本に比べたら余程厳として生きており、社会の端々でそれを感じさせられます。

そしてまた、各人の能力は階級的な部分と平行関係にあると感じられる事が多く、勿論昔の階級制度のそっくりそのままの投影ではないものの、上と下との能力の差が日本社会よりも大きいように感じました、つまり優秀な人は一人で何人分の

働きをしているのだらうと不思議に思うくらいよく働き有能なのに、下の方の人になると、何人でやっと一人分の働きをしているのだらう、と訝りたくなります。書類関係でも電話料金の二重取りはするわ、書類を送ってくれと言ってもちょっとルーティンワークから外れるとなしの碟で、挙句の果てに配達途中で紛失された携帯電話の請求書の再発行が五ヶ月後に来たり、銀行口座一つを開くのに三ヶ月かかったり、と、日本の社会システムの優秀さをしみじみと感じます。また今いるフラットでも他の階では夏にセントラルヒーティングが壊れた事がわかったのに、十一月半ば現在でまだ修理されていない状態で、呆れてしまいます。

ただ、このいい加減さというのは、労働者側にとっては非常にいい条件らしく、みなさんちょっとストレスがかかったからと称してはほいほい仕事を休みますし、仕事を始める時間はパンクチュアルでなくとも、終える時間は感動的にパンクチュアルです。移民で難民申請した者や、独身で子供を産んだ者には手厚い保護が与えられて家まで支給されるので、もう働くならイギリス、と言いたいくらいです。だから栄養士の友人の話によれば、あれだけ脂分たっぷりの偏った栄養の取り方をした上、「健康管理のための食事制限」も「ストレスがかかって健康に悪いから」しないというポリシーがあってもイギリス人が長命なのは、ストレスを実によく避けるからだという、日本と比較して考えるとどっちがいいのか考え込んでしまうような結論でした。

食事はと言えば、食材は非常に豊富で、特に日本だと高価な欧風食材も安く手に入るの、手の掛からないものほど美味しいです。ですからイギリスの食事は自炊に限ります。ただこれは都会で貧乏学生生活をしているからで、イギリス人は外食にはお金を掛けないから、家庭料理はおいしいのだ、という弁護論もあります故、そこは誤解がないようにしたいと思います。またイギリス料理でない、タイ料理やインド料理などのエスニック料理はおいしいのですが、それもかつてはイギリス領だったのだからイギリス料理だと言われれば、それも一つの論理です。また、狂牛病に関しては、一部の人は心配していますが、大勢、特にワーキ

ング・クラスの方々は殆ど気にしていないように見受けられます。一般的見解としては、「挽肉」でなければ問題ない、というあたりで落ち着いています。何れにせよ、学生食堂など安い所の食事はとことん不味く、人間が考える限りの不味さです。日本と違うのは、日本では「安くても美味しい」ものがあるのに対して、イギリスではそれはあり得ないことです。

これは住居も同じで、特にロンドンなどの大都市では、値段と質は値段が下がれば下がるほど正比例しており、あるライン以下は、値段が下がっても質は安定している、という日本の賃貸住宅事情とは正反対です。またロンドンの賃貸住宅の年毎の値上がり度は著しく、新聞でも社会問題になっていました。ただ、一介の留学生の身では、この住宅問題と、路上の至る所で「Change please!」と叫んでいるホームレスの方々との問題とがどのように関連があるのかまではわかりません。

またプア・ホワイトの問題というのも重大なようで、アフガン攻撃の際に拾われた町の声を読んでいると、外国人に対する彼らの内面感情と言うものは、表面上友好的に振舞っている以上に複雑なものがあるということは実感しました。ただ人種差別的な感情を持つ人間の性というものは、どう足掻いても克服しようのないものであり、自分が差別される対象になってしまっているといまいと人間の力ではどうしようもないものだということは、無力感と共に感じます。

そして、この避けたいという感情がどうしても噴出してしまいがちになるのは、人間の清潔感を含めた感性という部類が引き起こす問題ではないでしょうか。日本人ほど清潔な民族はいないといいますが、それは本当だと思います。トイレに入っても手を洗わない人、洗剤の泡が一杯ついたらまま食器をしまう人、食器というものは食事後ではなく食事前にまとめて洗うものだと思っている人、これが異常ではない人々です。また音に対する感覚も、東洋人の常識ではうるさいと思うのに、彼らは誰もそれをうるさいと感じません。「気にしない」というのはとても積極的な態度なのですが、「他人の迷惑も気にしない」では困るというのが実感です。そういう時には遠慮は禁物で、東洋

人が寮などで文句を言いに行ったら寮監の側からまず言われるのが「何故今まで言わなかったのか」という難詰です。清潔感でもセンスでもイギリス人は東洋人にこんなに劣るのに、と考えてしまいがちで、また実際東洋人留学生同士ではガス抜きとして悪口も言ったりはするわけですが、でも逆に言えば、あれだけ不潔なイギリスから、それを全く感じさせない芸術や学問が開くことこそ、この国が生み出した学問と芸術に折々触れるにつけ、やはり素晴らしい妙なる業だとしか言い様がありません。そういう生理的な嫌悪感・身体性を、自らその中に身震いしつつ身を浸しながらも、心頭滅却してゆくところで素晴らしい出会いもあるというのが私の実感です。

最後に留学中の人間関係ですが、外国人とはイギリス人であろうと他国人であろうと、目が点になるようなことはまま起こっても傷つけられる事は少ないと思いました。しかし、日本人同士だとお互いが日本人だからと甘えあい、依存し、また期待を裏切られたと言って、相手を非難し傷つけあうケースも見受けられます。中には、折角留学したのだから日本人とは付き合わない、と豪語して日本人を極力避けようとする人もいます。し

かし、私は個人的にはたとえどんなことがあっても、日本人を日本人だからという理由で、あえて避ける必要は全くないと思いました。母語が共通なだけに互いに助け合える部分はありますし、もしも傷つけられたとしてもそれは個人の人格の問題に過ぎないわけですから。日本人とはたまたま近い地域から来て、英語の他にも日本語という二つの共通語を持っているだけの人のことと考えています。二十一世紀初の戦争の結果、世界ではまた十九世紀の植民地主義的発想に逆戻りしそうな趨勢も見受けられますが、そういうご時世だからこそ、二十世紀の流行の上滑りをしているだけではない、真の意味での「地球市民」という言葉の大切さを感じるこの頃です。

末筆ながら、イギリス留学を考えていらっしゃる方のご連絡頂ければ、私の出来る範囲でお話するくらいのことは出来ると存じます。ただ何れにせよ、留学したからには、どんな形であれ、自分が納得できるようなそれなりの物を掴んで帰りたいと心しております。日本や世界にいらっしゃる皆様のご多幸をユーラシア大陸の西の果ての白亜の島、アルビオンから祈っております。